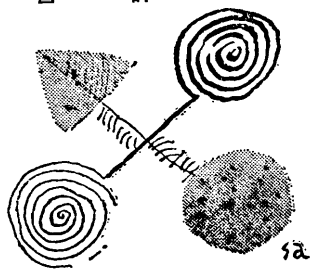


書 評



イポリット 著
市倉宏祐 訳

『ヘーゲル精神

現象学の生成と構造』

五十嵐 靖 彦

このたび市倉宏祐氏の翻訳により、多くの人々の手許に供されうに至った、イポリットの本書は、『精神現象学』を、徹底した内在的分析観点に立ち、周到に解明した本格的なヘーゲル研究書である。上下巻合わせて九〇〇頁にも及ぶ大著である。内容的にはすでに原著で定評を確立している通り、権威ある貴重な文献に数えうる深さと広さをもっている。市倉氏は、訳者あとがきによれば、この、決して平易とは言いがたい難い労作の下訳を、ほぼ一年で完成されたとのこと、敬服に値しよう。訳文はきわめて読み易い。ヘーゲルからの引用文も、仏訳経由の故もあろうか、不思議なほどわか

りいい。コンテクストによく溶けこんでいるのである。

『現象学』を繙く者をしばしば坐礁させる、難解な思想と用語法、問題領域の広さ、歴史的諸事実を背景とする暗喩的論述、そしてなによりも、序論の立場と〈精神〉の章以降との構成上のズレ、これら諸問題に対して本書は正面から取組み、一つの解答を与えている。その意味で、ヘーゲル読者に多大な恩恵をもたらすものと言えよう。

イポリットは、自分のあるポジティブな立場から対象を分析し、批判・非難するといった態度を本書で執ってはいない。それ以前の根底的な関心が彼を支配している。

すなわち、ヘーゲルとの溝を埋め尽し、ヘーゲル主義そのものを、あいまいさ・難点・残された問題等を含みこんだ、その実像において明確にしようとするのが、本書の著作意図をなすものなのである。ここから、

ほぼ『現象学』の叙述次第に従って(彼の仏訳は、ラッソン・ホフマイスター版を底本とするそうである)、全体が七部に分かれたれ、ヘーゲルの論旨に即した、執拗なまでの解釈作業が遂行されることになる。各部の検討は詳細をきわめている。その形式的な特質を挙げておこう。『現象学』を徹底的に研究せんとするイポリットの課題は当然ながら単にこの著作の枠内にとどまることを許さない。先ず第一に、青年期ヘーゲルの原型的思想、イェナ期における、主観主義的反省哲学と存在主義的同一哲学との両極の自己同化の過程、また『論理学』以降の体系的構想、これらとの対応関係を抜きにしては考えられまい。イポリットはその都度必要に応じてこれらの全体を想起し、『現象学』との内的連関を再構成しようとする試みをしている。特に、〈不幸なる意識〉、〈運命〉、〈宗教〉についてそれらがみられるであろう。更に加えて、ヘーゲルが直接言及して

いるのはむしろの事、解釈上関連するはずの、哲学史上の諸学説、文学作品を広般に援用しつつ、ヘーゲルの内的問題そのものに迫ろうとする点は、本書の大きな特色である。とりわけ著者の文学的素養は深く、教養の幅広さを見ることが出来る。そして最後に、ヘーゲル以降の問題に属するものとしての、諸解釈、諸思想とのつながりの問題への言及。ヘーリングやハイム、ローゼンツヴァイクに対する一定の態度決定。フオイエルバッハやマルクス、ヤスパース等との興味ある対比。とは言え、本書の性格上、この対比が中心をなすものでないことは勘案されねばなるまい。現代思想そのものの中で呼吸している者には、そこにある種のにえきらなさを感じとれるにしても、そこに本書の評価の中心点を置くべきではないと思われる。

さて、次に本書の内容についてである。第一部は、いわば総論である。以下第二部は「意識」、第三部は「自己意識」、第四部は「理性」、第五部は「精神」、第六部は「道徳性」と「宗教」、第七部は「絶対知」をそれぞれテーマとしている。(なお、第六部に生ずるかもしれない奇異感に答えてお

こう。第六部は正確には「精神の自己知ら絶対精神へ」と題されている。ここからわかるように、イボリットは「絶対自由と恐怖」迄をいわゆる客観的精神とみており、それ以後の「自己自身を確信した精神」、究極には、「精神的自己の第三の型」としての「良心」は、すでに絶対的精神の圏内に高まっている、という見方をとっているのである。ここに、絶対精神の自己意識たる宗教と同じ箇所で見えうる根拠づけがなされているのである。) 第二部から六部迄は『現象学』本論の諸段階の各論的解釈に属する。要約はむしろ不可能だが、印象に残るいくつかの解明を挙げるとすれば――

プラトン・バルメニデス・ソフィストらと結びつけた感覚的確信の弁証法(第二部)。フィヒテの実践哲学はヘーゲルからみれば、主・奴の対立を内面化した不幸なる意識にほかならないとする評定(第三部)。ヘーゲルは観念論を、「精神史の現象」として提示することによって、主観的観念論とも、シェリング流の自然哲学とも区別される独自のエレメントを獲得するに至ったのだ、という指摘。これはニコライ・ハルトマンの確証と敷衍をなすものである(第四部)。

更に、自由意志を本質とする道徳的行為との相違にかなり意をもちいた、人倫的行為の簡明な分析(第五部)。この箇所には、運命、教養、言葉、対象性等ヘーゲルの重要概念への多面的論及がみられる。第六部では、ヤスパースの「歴史性」概念の検討を導入部とする、ヘーゲルの「良心」観の分析がユニークであろう。このテーマに関する著者の描写は、一段と筆の冴えをみせているように思われる。われわれは、「決断」を強調する著者に導かれ、実存哲学に遠くはないものとしてヘーゲルの「良心」をつかむ視点を与えられるだろう。むしろちがひも含めてだが、問題の、罪の赦免の弁証法については、著者もまた苦慮しているようである。著者は、卒直に、この思想は豊かな内容による喜びと共に、曖昧さからくる絶望をも与える、と語っており(下二九二頁)、現代哲学の一つの課題への示唆を与えている。ヘーゲルの実像を明確にしようにとする著者の態度はここにも一貫しているのである。

以上の各論的な解釈の問題については、挙げ切れない豊富な内容が、他に数多くみられる。ヘーゲルの重要概念で、著者の分

析のまなざしをまぬかれているテーマはほとんどないと言っていいだろう。幸い読者は、下巻の巻末に、事項索引、人名索引、参考文献を参照できる便を与えられている。これは大いに役立つであろう。

さて、第一部と第七部では、『現象学』の全体的な性格規定にかかわる問題が取扱われている。由来『現象学』は、その成立事情からくる、構成上、内容上の統一性をめぐる重要問題を残している。予備学が体系第一部か。序論で規定された当初の著作意図は、『理性』迄であって、『精神』以降は、個人的意識の弁証法の枠をはみ出すのではないか。もしも歴史哲学の性格をもつとしたら、不完全なものではないか。最初に書かれた序論と、最後に書かれた序文との間にはズレがないか。等々の問題である。ヘーゲルは、前半第一部と後半第二部との「断層」を指摘したし、ハイムは、歴史に引きつけた上で、超越論的心理学によるゆがみを云々した。では、イポリットの主張はどうであろうか。

彼もまた、『意識の現象学』と『精神の現象学』との間に断層を認めている(上七〇頁)。が、同時に、ヘーゲルの著作意図の変

化を発展的にとらえ、でき上がった『現象学』にはそれ独自の統一性と性格、存在意義があると認めようと「願う」(上七九頁)のである。ここに『現象学』は、現象学的様相における、ヘーゲルの全哲学の論述であって、実は「真に有機的な体系となつてゐる」(上八二頁)と主張されるのである。

イポリットによれば、現象学的様相とは、一方では経験的意識を学的意識へ、他方では個人的自我を人類的自我へと高めんとする二重の教育的課題と媒介させることなしには、学は成就しがたいのだ、という独特の絶対者観のもとに、精神の直接態たる意識をエレメントとして学を展開してゆく仕方にはかならない。かくて『現象学』は、現象学的存在論、認識論の本体学とも言うべき両義的性格をもつと規定されることになる。同様に歴史の問題についても、ヘーゲルは、学としての絶対知は、歴史的前提抜きには語り出せないという、歴史哲学の可能根拠の基礎づけに腐心しているのであって、決して世界歴史の哲学を叙述しているわけではない、とも語られることになる。第七部では、『序文』と『絶対知』、また『論理学』を素材にしながら、以上の

主張を一層発展させている。なかなか難解な箇所である。興味ある分析は、『論理学』と『現象学』という、二つの学的体系の相違と対応関係についてである。『論理学』では『現象学』とは逆に、思弁的思惟が第一の次元をなし、認識論は背後に退いている、という主張(下三七八頁)は、両者の循環的依存関係を説得的に語るものと言えよう。

以上は大ざっぱなイポリットの論旨である。本書には、たとえば第七部における、自然とロゴスと精神、との関係をめぐる分析などを含めて、かなり難解な部分も数多くある。また、ある意味での不分明さ、すなわち、結局は、二元論的解釈を可能とせずにはおかぬ、ヘーゲル自身の叙述の曖昧さの確認、もまた伴っている。イポリットは、本書で内在的関心を一貫させ、ともかくもそれらを全体として可能な限り明確にしようとする努力を傾けたわけである。読者は、この努力の跡を迎えることによって、ヘーゲルによって残されている問題の、正しい設定の仕方というものを種々学びとることができるにちがいない。